日本バプテスト連盟 宣教部 教会音楽室 ニュースレター

No.24
2022年3月15日

礼拝さいこう

新型コロナウィルスに直面して教会は･･･⑥

教会音楽室長　江原美歌子

コロナ感染対策による制限により「賛美歌を歌わないことに慣れてきてしまっているのが怖い」と、先日耳にしました。ウィズコロナで経験してきたこととその課題から、私たちは何を感じ取ってきたのでしょうか。教派を超えてスペイン風邪流行における教会の対応を検証した『100年前のパンデミック』（宮坂キリスト教センター編）では、「日本の教会はその経験から学ぶことをしなかった。信仰的・神学的問いかけとは受け止めなかった…そして忘れてしまった」と報告されていました。「忘れないために」「この経験を踏まえて先に進むために」書き記すことの重要性を知らされます。今ニュースレターでは事例紹介を通して、諸教会がどう向かい合ってきたかを共有してきましたが、様々な気づきあいをきっかけとして教会がさいこうされることを期待し、共にあらたな思いで礼拝に臨んでいきたいと願わされています。

コロナ感染危機に加えて、ロシアの暴挙によるウクライナ侵攻という、あらたな平和の危機に直面しています。主よ、私たちの平和への願いと叫びをお聞きください。「つるぎを鋤とし」という賛美歌を繰り返して歌います。ウクライナの平和が一日も早く導かれますようにと心をあわせて祈りつつ。

Index

1)　「騒ぎと静けさの中で 」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川内活也　（帯広）
2)　「コロナがあってもなくても 」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・城倉　啓　（泉）
3)　「礼拝を第一に 」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・坂西恵悟（横浜JOY）
4)　「コロナ危機での礼拝での奉仕を通して」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小林大記（豊橋）
5)　「わたしにできる小さなご奉仕のプレゼント」・・・・・・・・・・・・・・・・・調みくに（和歌山）
6)　「21年度主題、主に繋がって歩む」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・立田卓也（松山西）
7)　「賛美と祈りの時 」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・竹田殉聖（福岡新生）
8)　「思わぬ恵み 」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・村田悦（大分）
9)　教会の礼拝事例紹介を受けて～応答コメント　・・・・・・・・・・・・・・・・濱野道雄（鳥栖）
10)「心をとぎすませて賛美する」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・片桐健司（品川）
11)「新生讃美歌ブックレットを用いた研修会に参加して」・・・・・・・・・・・竹之内理香（静岡）
12)「あなたと」（少年少女ひろば　メッセージソング）・・・・・・・・・・・・・本山大輔（豊前）
13)「れいはいさいこう」（聖歌隊再開から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・菊地るみ子（大井）
14)　神奈川連合礼拝音楽研修会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・白井由季子（百合丘）
15)　第8回教会音楽カフェから、著作権情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・教会音楽室

新型コロナウィルスに直面して教会は･･･

「騒ぎと静けさの中で 」

帯広バプテスト･キリスト教会　川内活也

2020年2月28日、全国に先駆け、北海道知事による「緊急事態宣言」が発表されました。

2週間の道内全校閉鎖と全道民への週末外出自粛要請という突然の発表を受け「教会が負うべき社会的責任」と「信仰の証しとしての礼拝」をどのようにとらえるべきか、教会の在り方を役員会で協議する事となりました。

多くの方々同様、私たちの教会も、急速に事態が動いたコロナ騒ぎの中で、慌てふためきながら、後手後手な対応となっていたように思います。「心を騒がせてはならない」との主の招きに、落ち着きを取り戻すまではしばらくの期間を要しました。

共に集まれない中で、礼拝の在り方については役員会に一任されることとなりました。幸い、帯広では「感染爆発」というほどの影響は広がっておらず、人口的にも小規模な地方都市であるため「礼拝は休止なく継続」という方針を当初から決断しました。

但し、会堂に集まるのは奉仕者（司会・奏楽・配信）を原則とし、その他は基本的にリアルタイム配信のＷＥＢ礼拝への参加を呼びかけました。しかし、ネット環境が自宅に無い方々を中心に、緊急事態宣言中にも20名前後の礼拝を続けることとなりました。

集まる事で非難を受けるような地域環境ではありませんでしたが、集会を継続するためにも「感染拡大防止対策」には細心の注意を払いつつ、「礼拝時間の短縮」の課題を前に、改めて「礼拝とは何か？」を静まって考え、帯広教会では＜礼拝は「祈り・御言葉・讃美」をもって「主との交わり・主に在る交わりを確認し、証しする場」である＞という認識をもって、礼拝プログラムの再編をすることになりました。

飛沫感染防止のため、祝祷時以外は着席のままとし、賛美歌（最大で2番まで）は頌栄を含めて３曲に減らしました。司会者の祈りは「主の祈り」に合同とし、聖書も説教箇所だけとして交読文の使用を取りやめました。

こうして、コロナ前には80分前後で捧げていた礼拝時間を、緊急事態宣言下では30分前後に、宣言解除後の現在も50分前後に短縮して行うことで、複数人が同一空間に滞在する時間を抑制しながらも「祈り・御言葉・讃美」をもって「主との交わり・主に在る交わりを確認し、証しする場」としての礼拝を守っています。

ただ、礼拝前後の5～10分間、全窓開放で換気を行いますが、日中最高気温も氷点下という冬の北海道気候では、急激な寒暖差によるヒートショック等の体調変動が心配です。

「コロナがあってもなくても 」

泉バプテスト教会　城倉 啓

コロナ状況における泉バプテスト教会の礼拝の特徴は、会堂での礼拝を停止しなかったことと、オンライン（ZOOM）併用をかなり早い段階から（2020年4月初旬）実施したことにあります。会堂に集まることを選んでも良いし、自宅での礼拝を選んでも良いということにしました。そのことは奉仕担当者にも当てはまります。聖書朗読、祈り、奏楽も自宅から行えるようにしました。結果、感染状況が厳しくなると会堂に数名・オンラインが20数名、逆に感染状況がおちつくと会堂に20数名・オンラインが数名という礼拝者数で毎週推移しています。12月5日の礼拝では、ちょうど両者が12名ずつでした。

礼拝プログラムはコロナ状況にかかわらず同じものです。会衆賛美も5曲全節歌っています。主の晩餐も変わらず毎週行い、自宅での陪餐も可能としました。カトリックならばありえない事柄ですが、バプテストなので礼典執行・配餐・陪餐を各自でできると解しました。感染の危険を感じる参加者は（あえて心のうちを言わなくても良いのですが）、自宅でもあるいは職場や車中でも、礼拝する場を選ぶことができます。2021年初頭には個包装のぶどうジュースとウエハースが市販されるや否や、早速それを用いて晩餐による感染危険性を低める努力をしました。

とにかく素早い試行錯誤が売りの泉教会です。より良いオンライン併用礼拝を目指して、集音マイク、スピーカー、カメラなど改善努力を続けています。礼拝者の平均年齢（30歳代）の低さも関係しているかもしれません。一長一短ありますが小さな教会なので意思決定が速やかです。

各人の選びについて、お互いにとやかく言わないことも、コロナ以前からの泉教会の文化です。礼拝奉仕担当者であっても、気兼ねなく無断で休めるし、みなが快く代役を引き受けます。奉仕者が「何らかの所作の過誤」を犯しても誰も咎めないで大らかに笑って許し合うことを旨としてきました。それが試行錯誤を許容する背景にあります。

「礼拝を第一に 」

横浜JOYバプテスト教会　坂西恵悟

2020年3月末、神奈川県知事から外出自粛要請が出され、その後緊急事態宣言を迎えました。教会の役員会(以下、しもべ会)では、礼拝をどうするのかという話し合いがもたれました。

私たちの教会にはミッションステートメントがあります。その最初に「主の日の礼拝、祈り会、そしてデボーションを大切にします」と掲げています。これまでの教会の歴史の中で、大切にしてきた礼拝。礼拝を大切にしていくために、午後の集会などを極力実施せず、礼拝の恵みを新鮮なままそれぞれの場へと持ち帰っていくことを大切にしてきました。

この状況で何ができるのか、そのことをしもべ会で祈り、考えました。感謝なことに、教会のメンバーの中に音響や配信などに詳しい方がおり、その方々の知恵をいただいて、配信での礼拝をすることを決定しました。配信についても、YouTubeなのか、Facebookなのか、ZOOMなのかと議論しましたが、アクセスのしやすさを考え、YouTubeでの配信をするようになりました。集まることはできないけれど、配信を通して“いつもの”礼拝をそれぞれの場所でささげることができました。

一方で、懸念もありました。礼拝時間の約4割が賛美だったからです。私たちは礼拝の中で多い時は7,8曲賛美しています。集まることを再開した時に、どのような礼拝を行うのか、しもべ会でも話し合いが行われました。様々な意見がありましたが、結果として、①賛美の曲数を減らす。②大声にならないようにアナウンスする。③奏楽者の前に透明なビニールシートを設置する。④礼拝中、窓を開放し換気する。以上のこと決定し、宣言解除後に集まって礼拝を継続しました。もちろん、マスク着用や、検温、手指消毒の徹底も行っています。このように、様々な制限をうけながらでしたが、礼拝が決して途切れることなく、ささげることができたのは大きな主の恵みでした。

感染症の不安を覚える中にあって、特に2021年は感謝な出来事が多く与えられました。2020年夏の緊急事態宣言解除後から来られたご家族が転入会してくださったり、同時期に来られたナイジェリア出身の方(クリスチャン)と結婚された日本人の方のバプテスマの学びがスタートしたり、教会のメンバーから、礼拝のYouTube配信の紹介を通して、2021年のクリスマスにバプテスマを受けられた方が起こされたり、新しい命が2人与えられたり、結婚されるカップルが2組起こされたりと多くの感謝が与えられました。

新型コロナウイルスの影響により、教会の働きが制限される中、礼拝を継続することを第一に考え、 それ以外のことがほとんど出来ずに終

新型コロナウィルスに直面して教会は･･･

わった2020年。「何もできなかった」と憂いてしまうような年でしたが、礼拝を第一にし、継続し続けていたからこそ与えられた2021年の恵みであったと思わされます。

現在は、会堂での礼拝とYouTubeでのライブ配信、祈り会では会堂とZOOMのハイブリッドなど、コロナ以前の活動が再開していきました。会堂に集まることのできない方のご自宅に数名で伺って共に礼拝をささげる働きが増やされ、他教会とのYouTubeやZOOMを用いた合同礼拝など新しい礼拝のかたちも整えられてきました。何よりも、集まって礼拝することができるのが恵みであることを教えられました。

これまで大切にしてきた礼拝。かたちが変わった部分もあるかもしれませんが、これまで以上に、礼拝を大切にし、会堂でそれぞれの場所で共に同じ祈り、みことば、賛美をもって礼拝をささげていきたいと願っています。

「コロナ危機での礼拝での奉仕を通して」

豊橋キリスト教会　小林大記

コロナ危機となり、豊橋教会でも対応を迫られました。少しお分かちしたいと思います。

礼拝における感染防止については日本合唱連盟のガイドラインなどの情報をもとに、礼拝プログラムの短縮は行わず、手指消毒、換気、マスク着用、間隔をとって座る、２階の礼拝堂だけではなく１階でも礼拝の様子をビデオプロジェクタで映し人を分散させる、着席にて賛美する（頌栄・祝祷・後奏のみ起立）などの対策を行なっています。主の晩餐式も感染対策を行なった上で実施しています。

緊急事態宣言期間中の対応について執事会で取り上げられたことのひとつに、奉仕者が集まるかどうかがありました。感染への恐れや、感染拡大の最中に家族を家に置いて教会へ足を運ぶことは避けたいという声などがありました。2020年春の時点での結論は、教会への参集を控え、主日礼拝は礼拝堂で牧師一人で礼拝を捧げ、その様子をYouTube配信するというものでした。賛美歌の選曲では著作権に配慮し、肖像権も牧師のみが映る状況ならば問題ないため、緊急事態宣言期間中の礼拝動画を一般公開としました。しかし従来の礼拝の形のまま独りで行う一連の奉仕は負担が大きく準備も含め気が抜けませんでした。

2021年の年明け頃だったと思いますが、緊急事態宣言期間中の礼拝は基本的に参集自粛としつつも、PC操作などが不得手な方は参集可能という形をとりました。そして2021年の春に差し掛かる頃、礼拝動画の一般公開を通して新来者の方が礼拝に続けて参加されるようになったことをうけて教会員有志が礼拝へ集うようになり

ました。その頃に執事の方から「来られる人だけででも奉仕しませんか？」とご提案いただきました。正直なところ、タオルを投げ込まれた思いがしました。奉仕の負担に加え礼拝動画を公開することによって「晒される」ような感覚がぬぐいきれず精神的なプレッシャーが絶えずあったように思います。以後の緊急事態宣言期間中は、基本的に参集自粛とするものの礼拝奉仕可能な方は参加して共に奉仕することになりました。そして牧師以外の奉仕者が加わることによって肖像権の問題が出るため礼拝動画配信は限定公開とし、現在に至っています。

非常時とはいえ、分を超えた一連の奉仕を独りで行うことに問題がありました。そこにはもしかすると「きっとできる」といううぬぼれがあったのかもしれません。

礼拝をする人はだれもが奉仕を受け、だれもが奉仕をしています。聴衆の方であっても、賛美や祈り、反応、そしてそこにいるという形で、奉仕をしています。そのような関わりに支えられて私は礼拝に仕えることが赦され、礼拝を受けることが赦されていたのだと思います。

試みは今も少しずつ進めています。礼拝で用いられる賛美歌を歌っている動画の配信や、SNSへの説教要約の公開などです。感染拡大状況が変化するたびに執事会や信徒会で意見が交わされ、教会の営みも少しずつ変化が続いています。これからも教会の方々と共に話し合いながら進めてゆきたいと思います。

「まるで家畜小屋にあつまり、喜びあったわたしたち
わたしにできる小さなご奉仕のプレゼント」

和歌山バプテスト教会　調　みくに

新型コロナウィルス感染症を心配する中ではありますが、和歌山は比較的感染者が少ないため、礼拝をオンラインだけにしたり休んだりという対応をせずに休むことなく守ってきました。和歌山県で緊急事態宣言が発令されたときは少しの期間祈祷会を休みしました。また、近隣県で緊急事態宣言が発令されているときは礼拝プログラムを変更し30分礼拝、成人科やこどもクラスをお休み、賛美も小声やハミングという工夫もしました。

さて、そんな中での2021年度のクリスマスどうなるのだろうと不安はありましたが、イエスさまをお祝いしたい気持ちが不安よりも大きくなりました。そして迎えたクリスマス。2021年度のクリスマスは、喜びの中のクリスマスでした。マスクは外せなかったですが、ひっそりと讃美礼拝をまもることができました。そしてその礼拝は、一人ひとりができることを持ち寄ったすてきなすてきなクリスマス礼拝でした。教会員２人が入ったアカペラコーラスグループ「プラネットノーツ」のすてきな賛美はまるで羊飼いが夜、野宿して羊の番をしていた時にあらわれた天使たちの歌声でした。

・わたしにもできる！小さな奉仕

会場準備、バプテスマのお部屋の準備、聖書朗読、ろうそく点火、奏楽、祈り、お昼の用意、お昼を購入する奉仕、こどもたちの手話の奉仕。みんなの奉仕は神様の一人子イエスさま

に　まるで黄金、乳香、没薬をささげた東方の博士たちのようでした。

・うれしいバプテスマ式

この日、一人のこども（小２）のバプテスマがありました。まるで博士たちがみつげの言葉を受けて、別の道を通って自分の国に帰っていったように、バプテスマを受けたこどもと、それを見守る教会の一人ひとりが、イエスさまに出会って新しい道をイエスさまの光をいただいて歩んでいこうと決心させられたのです。

・きよしこのよるを手話で

もしかしたら、また小声やハミングで歌うことになるかもと、ひそかに手話で練習していた「きよしこのよる」、私たちは皆で手話讃美をしてこどもたちといっしょにイエスさまのお生まれをお祝いしたのでした。

・持ち帰りランチ

みんなで女性連合の世界祈祷週間献金のためと、建築献金のためと持ち寄りでミニバザーを開いたこの1年でした。クリスマスはなんとかティーパーティができないかな？と考えていましたが断念し、持ち帰りランチをしました。コロッケや、鶏肉とたまごの煮物、お漬物に、チ

キンカツ、チキン照り焼き、いなりずしなど豪華な持ち帰りランチとなりました。そして売り上げは建築献金としてささげました。

・みんながささげる

みんなが自分のできることを、できる範囲でささげたこの1年。イエスさま赤ちゃんを前にしてもすてきな賜物をささげあったあたたかいクリスマス礼拝でした。イエス様赤ちゃんのあたたかい光をいただいて、2022年も歩んでいきます。できることは小さいかもしれないけど、みんなで賛美しながら、祈りながら、協力しながら、みことばをともしびとして歩んでいきたいです。和歌山からもみなさまのことを覚えて祈っております。

「21年度主題、主に繋がって歩む 」

松山西キリスト教会　立田卓也

松山西教会は、2019年6月にロバートシェラー牧師を天に送ってから、教会員が教会をどのように守り続けていくかを改めて突き付けられました。月一晩餐式は連合内の牧師先生に執行してもらいながら、年を明けて牧師招聘を学び教会員の意見を集約させようし始めた頃、皆さんと同様に、礼拝活動の縮小を決定しました。その間、牧師招聘の歩みは滞りを余儀なくさせられた無牧師という環境下での私たちです。

・聞くこと

メッセージを同学年３人の執事に任され、連合内の牧師先生の奉仕もお願い出来なくなり、自分たち教会員が何とかしていかなければならないと、腹をくくりました。メッセージの内容も教会の未来を語っていたのが、信徒が取り扱

新型コロナウィルスに直面して教会は･･･

うには分不相応ながら、社会や死についても踏み込むようになりました。また、今まで歌ってこなかった賛美がメッセージによって増え、歌い馴染みがないため声が小さくなる物足りなさを覚えつつも、歌詞とメロディを味わうようになりました。ハンドベル演奏奉仕は引き続き教会の大きな賜物でwithコロナです。また、牧師招聘に絡み、当教会を言い表す言葉をつむぎ、その過程は教会員の分かち合いになりました。

・諦めること

行かないという選択肢も否定しないこと。自粛期間中、必ず誰かが教会で主日礼拝と祈祷会を守るという奉仕体制を確立しました。奏楽者とメッセンジャーの二人での教会からの配信（ホストは別会場）も。メッセージと週報は郵便かメールか直接かで届ける。証しを週報で分かち合い、再開を待つ。自分が行けなくても、礼拝が守られている、祈ってくれていると強く気づかされたのでした。

さて私事、エンタメを生業としていた者ですが、今パンデミック当初、文化界がヘルプの声を上げたところ、「困っているのは自分たちだけではない」と、一部非難の声が聞かれました。次いで子ども達の学びや遊びも現場の声が優先されることなく休止され、社会から存在を否定されたような気持ちでした。そのような中でも世界中の教会は、その毎週の礼拝の存続を賭けて、自分たちで考え・決定し、感染症対策をそれぞれ取りながら守り続けてきたこと、人が集まれなくても途切れず礼拝を持ち続けられていることは、私にとっても拠り所でした。礼拝死守との側面が発展して、主体性を持って参画し、みんなで礼拝を建てあげていく、その地で教会が開かれ続けていることの意義（ただ今はアウトリーチへ教会の業が向けられていないのが申し訳ないですが）とは、私は（もちろん全ての人が）、行けても行けなくても礼拝に招かれている、という存在感の肯定でした。

「賛美と祈りの時 」

福岡新生キリスト教会　竹田殉聖

当教会も他の教会と同様に感染対策をしてきました。マスク、教会玄関での手指消毒、礼拝座席のソーシャルディスタンス、換気の徹底、次亜塩素酸ナトリウム空気清浄機の設置、礼拝後全員で会堂全体をアルコール消毒等、最善のことをしつつ、礼拝は緊急事態宣言下でも継続しました。コロナ以前より教会に病気等の理由で来れない方々の為に礼拝のネット中継はしておりましたが、特にこのコロナ危機では大変役に立ちました。そのような中でどのように礼拝、賛美に取り組んできたのか２点記載致します。

・歌わずに賛美

礼拝では緊急事態宣言時は特別賛美をしませ

んでしたし、特伝でも特別賛美はありませんでした。特に特伝で新来者向けに特別賛美が出来ないことは悲しいことでした。それでも特伝の日曜日だけでも何か特別賛美は出来ないだろうか、と考えた結果、クワイヤチャイムやバイオリン合奏などを行いました。また１年前2020年のクリスマスは、賛美ではありませんが、スキットドラマ(賛美のBGMに合わせて無言で踊りながら聖書のメッセージを表現する)をしました。声を出すに越したことはありませんが、それ以外にも賛美の方法があることを知ることが出来たのは教会にとって恵みでした。

・伏して祈る時

この２年間、賛美が出来ない中で私たちの教会は祈りの時として過ごしてきました。賛美出来ずに、食事による交わりも出来ない事に悲しみを覚えました。しかしこれはまさに伏して祈る時ではないか、と思わされたのです。このコロナ危機でも礼拝を続け、特伝も春と秋に開催してきました。「折がよくても悪くても御言葉を宣べ伝えよ」との御言葉の通りに。しかし特別賛美が出来ない中で特伝が恵まれる為にはどうしたら良いのか？祈る以外にありませんでした。特伝前の４０日間は教会員で連鎖断食祈祷を行い備えました。その結果、特別賛美が無くても恵み溢れる特伝を開催することが出来ました。このコロナの時は伏して祈る時として過ごしています。それはまさに、イスラエルの民がバビロン捕囚下で涙の祈りを捧げたように。(エレミヤ29:12-14)(哀歌2:18-19)　そしてこのキリスト教の二千年間の歴史も又、まともに賛美を歌えない、礼拝出来ない時が多かったのではないかと思います。隣国韓国は第二次大戦前･戦中、日本の侵略により天皇礼拝を強要され、まともに賛美、礼拝も出来ない状況で、韓国の聖徒方は涙の祈りを捧げました。中国も1960年代の文化大革命時に教会は大迫害に遭い、「地下教会･家の教会」としてまともに賛美も出来ず苦難の時を過ごされました。韓国や中国の教会はそれらの苦難の時、祈りの時を経て、神様から多くの祝福を受け、その中で「新しい賛美」が生まれてきました。

今しばらくコロナ危機は続くため以前のような賛美は出来ませんが、まさに“善き力に囲まれ来るべき時を待つ時”なのでしょう。そして、その先に主はきっと素晴らしい恵みを用意していて下さると信じます。また皆様と声高らかに賛美できる日を待ち望みつつ、祈りの時を過ごして参りましょう。

新型コロナウィルスに直面して教会は･･･

「思わぬ恵み 」

大分キリスト教会　村田悦

大分教会は、2021年12月の礼拝から会衆賛美を再開、2020年3月以来、1年8ヶ月ぶりに声を出しての賛美だった。これまで会衆賛美をしてこなかった理由は、礼拝参加者の中に、ワクチンを打つことができなかったり、感染した場合、重症化するリスクの高い方がいたからだ。私達は、その方々が、安心して礼拝に参加できることを選び取ってきた。もちろん「賛美歌を歌いたい」という声も多くあった。しかしそれ以上に、皆で礼拝を献げたかったし、礼拝の場は皆に開かれているべきだと考えた。

そう考えるようになったきっかけは「ステイホーム」だった。緊急事態宣言中、大分教会は、集まって行う形での礼拝を止めた。「ステイホーム」の号令の下、皆が家に閉じ込められ、その間、普段礼拝に集っている方々の中には、強い孤独感や不安を覚え、混乱している方々がいた。家が必ずしも安心できる場所とは限らないことも知った。それによって、教会、礼拝は、そのような方々にこそ開かれているべきではないかと強く思わされたのだ。

ただこの間、何もせず会衆賛美が再開できる時を待っていたわけではない。どの段階で再開できるのかを話し合い、再開するためのプロセスを考えてきた。「まずは、聖歌隊による賛美から再開してはどうか」「事前に録画してはどうか」「楽器を使って賛美するのはどうか」等々。その中で、新しい賛美の仕方にチャレンジすることもできた。声に出して歌うだけが賛美ではないと思うようにもなった。歌えないからこそ、これまで以上に詞に心が向き、歌に込められた想いや意味を噛みしめるようにもなった。会衆賛美を再開していくプロセスでは、礼拝参加者一人ひとりに、聞き取り調査を行った。一人ひとりの意見を大切にしたいという想いからである。このような想いが与えられていったことも感謝なことであり、このようなプロセスを通して、隣人性が養われたように思う。「“共に”礼拝を献げたい」という気持ちが与えられ、普段私達が“誰と”共に礼拝を献げているかについて、自然と意識が向くようになったと思う。

会衆賛美を再開した日はマスク着用で歌いづらく、隣の人の様子を気にしながら声を出したが、まわりの声を聴きながら、共に賛美できる喜びを感じ、自由に歌っていた頃よりも、皆で共に賛美を献げているように感じた。

もう一つ紹介したいのは、「クリスマスコミュニティー・コンサート」。このコンサートは、地域の人達との出会いによって生まれた。きっかけは、ワクチン接種予約のお手伝い。電話がつながらず予約できない人たちがいるということを知って、インターネットによる予約の手伝いを呼びかけた。そこで出会ったのが、Aさんだった。私は、このことを通して、Aさんと友だちになった。 ある時、Aさんと教会の話をする機会があり、「この地域のために何かしたい」と言うと、その想いに共感してくださって、「自分は音楽をやっているが、何か役に立てないか」と言われ、計画されたのがこのコンサートである。 （右ページ下段へ）

教会の礼拝事例紹介を受けて

応答コメント

濱野 道雄 （鳥栖キリスト教会、西南学院大学神学部教授）

キリストの平和がウクライナになるよう祈ります。1人のいのちもこれ以上奪われませんように。人々が安心して眠れる夜が来ますように。ロシア軍の侵攻は決して許されません。

この戦争が始まり、世界の国々はウクライナにつくのか、ロシアにつくのか迫られました。そしてウクライナ、NATO、アメリカ、日本等の絆が求められ、ロシアも友好国との絆を強めようとしています。そして日本では「ウクライナのようにならないために」と、憲法九条の改定や核軍備の必要を主張する声も聞こえています。

しかし、力による絆は脆いのです。力奪われた人を傷つけるのです。「弱さ」こそ、1人1人異なる私たちの本当の絆になるのです。「まるで家畜小屋にあつまり」「一人ひとりができることを持ち寄った」（和歌山教会）、その絆にこそ「喜びあったわたしたち」の生きる場があると思います。十字架の周りに集まった人々が、最初の教会になったのですから（ヨハネ19：25－30）。

ウクライナで叫ぶ一人一人、子どもたち、性暴力の被害も報じられている女性たち、ロシアやベラルーシで拘束されている平和を求める人たちとの連帯を、国連の責任と共に、祈り求めていきましょう。

このような連帯の在り方、人と人のつながり方について、今回の事例紹介からも思わされました。コロナが明らかにしましたが、私は今の教会に、これまでより緩やかな、正確に言えば「強

事例紹介

（左ページから続く）最初、私は、地域の方が教会で、一緒に歌って楽しめたらそれで良いと思っていたが、Aさんは、やるからには教会を満員にしたいと言われ、その熱意に押されて準備を進めていった。チラシ作成や、自治会にも協力を呼びかけ、老人会の忘年会にも参加させてもらった。その中で、出演者も３グループ与えられ、気が付くと予約満席となっていた。当日は、飛び込みも含め、52名が初めて教会を訪れ、教会からも、スタッフとして15名が参加した。 コンサートの中身も驚きで、選曲はお任せしていたが、蓋を開けてみると、プログラムは「セイクレッドソング」というカントリー調のゴスペルソングで始まり、最後の曲も「きよしこの夜」だった。地域の方々から賛美歌を聞くことができるなんて、思ってもいなかった。私はそのことで、胸が一杯になった。

思うようにいかない日々が続いているが、想いを超えた恵みに感謝したい。

応答コメント

さ」ではなく「弱さ」を絆としたつながりが必要になっていると思います。コロナ時期における礼拝の仕方がまさにそうですが、何が正解か実は良く分かっていない人間の世界で（本当の正解は神しか知らないのですから）「各人の選びについて、お互いにとやかく言わないこと」（泉教会）が求められていると思うのです。この緩やかさは、豊かさにもつながります。礼拝式に「行かないという選択肢も否定しないこと」を選んだ松山西教会では、他教会の牧師による説教奉仕依頼をやめ、自ら担い出した信徒説教において「社会や死についても踏み込むようになりました」。

また「礼拝のYouTube配信の紹介を通して、2021年のクリスマスにバプテスマを受けられた方が起こされた」横浜ＪＯＹ教会のように、礼拝のあり方を変えざるを得ない中で、新しいメンバーが与えられている教会も少なくありません。そして、インターネットでそのつながりが始まり、コロナが収束しても対面で礼拝に通うことが難しい新しいメンバーをいかに受け入れるか話し合っている教会も複数で聞きます。対面で礼拝堂に集えれば勿論嬉しいのですが、コロナが明らかにしたように、人にはそれぞれの重要な事情があります。ここでもより緩やかな、「弱さ」を絆とした教会員像が求められていると、私は思います。

ただ、では「なんでもあり」になるのかと言えば、そうでもないでしょう。横浜ＪＯＹ教会では「礼拝を第一にし、継続し続けてきたからこそ与えられた2021年の恵みであった」とおっしゃるように、対面もYouTubeも同じ一つの礼拝であり、そこだけは譲れない線とされたときに、他のことについては緩やかになり、結果的に豊かさが生まれたということかもしれません。帯広教会でも「『礼拝時間の短縮』の課題を前に、改めて『礼拝とは何か？』を静まって考え、帯広教会では＜礼拝は『祈り・御言葉・讃美』をもって『主との交わり・主に在る交わりを確認し、証しする場』である＞という認識をもって、礼拝プログラムの再編」をなさっています。

このように緩やかにすると同時に、教会の「幅」と申しましょうか、ここからここの間で教会や礼拝の運営がなされていればよしとする、という「ガードレール」と申しますより、北海道の道路で良く見るあのやじるし、「矢羽根」（右ページ写真）のようなものが必要になるのでは、と私は思っています。その矢羽根の下から路肩になっているのですが雪に隠れて良く見えず、道路ではなくなるので注意してね、というあの矢羽根です。

この矢羽根の幅が、狭すぎもせず、広すぎもしないことが大切になるかもしれません。狭すぎる矢羽根ですが、教会や礼拝において、教会の誰か一人に負担が集まり始める、牧師や牧師の家族を含めて誰かが犠牲になり始めたら、狭すぎるので注意が必要ではないでしょうか。「非常時とはいえ、分を超えた一連の奉仕を独りで行うことに問題がありました。そこにはも

しかすると『きっとできる』というううぬぼれがあったのかもしれません。礼拝をする人はだれもが奉仕を受け、だれもが奉仕をしています。聴衆の方であっても、賛美や祈り、反応、そしてそこにいるという形で、奉仕をしています。そのような関わりに支えられて私は礼拝に仕えることが赦され、礼拝を受けることが赦されていたのだと思います」と豊橋教会で書いてくださっているようにです。

また反対に広すぎる矢羽根ですが、教会や礼拝において、自分を含め誰かの痛みに気づかない、無関心になるとき、それは「弱さ」がもはや絆となっておらず、緩やかさを超えて、広すぎてしまっているのだと思います。「普段礼拝に集っている方々の中には、強い孤独感や不安を覚え、混乱している方々がいた。家が、必ずしも、安心できる場所とは限らないことも知った。それによって、教会は、そして礼拝は、そういう方々にこそ開かれているべきではないかと、強く思わされたのだ」（大分教会）。「家」や「家族」というものが安心できる「絆」として当然視されている中で、しかしそこでこそ痛んでいる人もいる、声にならないうめきがそこにあることに、コロナをきっかけにしてでも気づかれた教会の皆様に敬意を表します。

このように、狭すぎて「誰かを犠牲にする」、広すぎて「誰かの痛みに気づかない」、そんなことにならない為の矢羽根を持つ、教会という、神の国に続く「道」。その真ん中には、「弱さのゆえ」（Ⅱコリ13：4）の十字架、痛みそのものである十字架が立っています（ヨハネ19：25－30）。神が最も居そうにない場、十字架にこそ神が顕れたのです。「力は弱さにおいて完全になる」（Ⅱコリ12：9、岩波訳）。そして神の国で私たちを招き待つキリストもまた十字架の主なのです（モルトマン）。

「韓国や中国の教会はそれらの苦難の時、祈りの時を経て、神様から多くの祝福を受け、その中で『新しい賛美』が生まれてきました。今しばらくコロナ危機は続くため以前のような賛美は出来ませんが、まさに“善き力に囲まれ来るべき時を待つ時”なのでしょう。そして、その先に主はきっと素晴らしい恵みを用意していて下さると信じます」（福岡新生教会）。「想いを超えた恵みに感謝したい」（大分教会）。私も共に信じ、共に感謝します。

賛美歌のことば

「心をとぎすませて賛美する」

部落問題特別委員会　片桐健司（品川バプテスト教会）

今から十数年前、「心をいつもとぎすませていたい」という小冊子を部落問題特別委員会が出しました。どんな言葉が人を傷つけるかについて書いてある冊子です。そのとき、様々な感想をいただきました。この冊子を読んだ多くの方から、知らないで使っている言葉が人を傷つけてしまうことに気がつけてよかったと、語ってくださいました。もう一方で、そうかも知れないけれどそんなこと言っていたら話す言葉がなくなってしまうよ、という声も聞こえてきました。

この冊子をよく読んでいただけると分かるのですが、この冊子は、その言葉を使うのはいけませんとか、やめましょうということを言っているのではなく、その言葉が人の心にどう感じられるかを考えてみよう、ということを伝えたくて書いています。

ある人にとっては、ごく普通の言い方でしゃべったひとことが、ある人にはその場にいられなくなるぐらい辛い言葉であったりします。そのことに気がついてほしいのです。「心をとぎすませて」とは、そういう意味です。

最近、テレビの番組で、アイヌの人が登場したとき、そこで出演者のひとりが軽い冗談のつもりで言ったひとことが、実はアイヌの人たちにとっては耐えられない言葉だったということがありました。それを言った人は、もちろんそういうつもりで言ったのではありません。ですから、その時点で罪はないのですが、でもそのひとことを言ってしまったことでそこにいた人だけではなく、アイヌの人たちみんなを傷つけてしまいました。その出演者は、大変なことをしたと後から考えたと思います。その場では、周りのスタッフも誰もフォローしなかったと言いますから、言った人だけではなく周りも同じ過ちをしたことになります。差別の言葉には厳しく言われていた人たちだろうにと思ってしまいます。

賛美歌は、心から神を賛美して歌いたいです。それだけにそれを聴いて人が傷つくようだったら、それはとても悲しいことです。実は、これまでも指摘があったように、新生讃美歌の中にもそういう言葉がたくさん含まれています。賛美するときは、ただ気持ちよく歌うだけでなく、その言葉に含まれている意味を考えながら歌いたいと思います。誰もが傷つくことなく心を合わせて歌えるように、心をとぎすませて歌いたいと思います。

「新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」 これからのスケジュール紹介

第3回　2022年5月17日(火)19:00～21:00

第4回　2022年9月3日(土)　13:00～15:00

第5回　2022年11月1日(火)　19:00～21:00

第6回　2023年2月4日(土)　13:00～15:00

22年度、1年をかけて『新生讃美歌2003』の総括をし、それを踏まえて、これからの賛美歌と宣教について考えていきます。

第2回 「新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」に参加して

静岡キリスト教会　竹之内理香

2022年2月26日（土）13：00～15：00、オンラインを介して集まり、『新生讃美歌ブックレット』をテキストにして「礼拝と会衆賛美」について学びました。「神の働きは教会の占有物ではなく、教会が出かける前に神はすでに出会いを自ら示している」との宣教に基づいて言葉が創作されている賛美歌を知り、賛美歌と宣教が深く結びついていることを印象深く学びました。その上で、色々な背景を持つ方々と心を合わせて礼拝ができるように意識して準備し、礼拝を整えていく必要があるのだと思わされました。

後半は「ミーター（韻律）」について学びました。「この賛美歌の歌詞が礼拝にぴったりだけれど、旋律に馴染みがない」という事があります。同じミーターであれば、みんなが馴染んでいる旋律の賛美歌と合わせる事で、言葉に集中して賛美を捧げる事が出来るというのがミーターのすごいところなのですね。さらに、新しい賛美歌の創作に挑戦してみましょう、ということで、『新生讃美歌』41番「いとも慕わしきイエスの思い」のメロディに合わせて同じミーター（86 86）で歌詞を創作。え、今ここで作るんですか？とびっくりしましたが、みなさん全然動じず、あっという間に＜平和＞というテーマで新しい賛美歌が生まれました。リレー方式で1フレーズずつ紡いでいき、そして、参加者全員で祈りを込めて賛美しました。

「争い絶えざる　この世界を
平和の神こそ　導きませ」

みんなで一緒に賛美ができ、うれしかったです。私は今回初参加でしたが、豊かな学びと交わりの時をいただきました。これまでもお知らせは目にしつつも、参加に至らずにおりましたが、今回、地方連合からのお知らせを各教会音楽関係者あてに一斉メール配信にしたことで直接連絡を頂き、同じ教会の奏楽者で誘い合って一緒に参加することにしました。これからも継続して賛美についての学びを深めていきたいです。また、皆さんの教会の賛美の工夫など、これからも情報交換ができるとうれしいです。

次回！「第3回新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」のご案内

2022年5月17日(火)19:00～21:00　テーマ:「賛美歌とことば」

「新生讃美歌ブックレット」では、ことばの課題として、「信仰告白としての賛美歌～『ことば』を意識して」（P11）と「賛美歌の『ことば』の取り組み」として、「一教会からの問いかけ」（P22～P38)、「特別委員会対象アンケート」結果報告と賛美歌のことばの意識化について紹介しています。

「新生讃美歌アンケート」から6年となりますが、特別委員会から代表者にご参加いただきつつ、その後の賛美歌のことばの意識化について共有していただき、これからの賛美歌について考えていきたいと願っております。「第3回」とありますが何回目からでも出席可能です。ご一緒に学びませんか？

「あなたと」（「少年少女ひろば」メッセージソング）

青少年専門委員　本山大輔（豊前バプテスト教会）

2020年度に開催予定であった全国少年少女大会が中止となり、青少年伝道室はコロナ危機の中であっても青少年と「つながりたい」という思いからオンラインを用いての「少年少女ひろば」を始めました。毎回の全国少年少女大会ではテーマソングが作成されますが、少年少女ひろばでも「共に分かち合う」賛美があるといいのではないかと思いが与えられ、私がメッセージソングを作成することとなりました。それが今回紹介する「あなたと」という賛美です。

この曲の歌詞を書くにあたり、多くの示唆を与えてくれたのは西南学院高等部の学生たちでした。私は2020年4月より西南学院高等部の聖書科の非常勤講師に任用され、新型コロナウイルスのためにこれまでとは違う学校生活を強いられている生徒たちと出会わされてきました。その出会いの中で、「あなたと」の「歌詞」が与えられていきました。「あなたと」の中では「～たい」という主観的な言葉が繰り返されます。これは賛美でなく、個人的な思いではないかという批判もあるかもしれませんが、やりたいことが奪われた、彼ら、彼女らの率直な神さまへの願いと叫びをこの歌詞に込めました。また、「人が独りでいるのはよくない」という聖書の言葉は、登校することすらままならない生徒たちと特に分かち合ってきた御言葉であり、そのまま歌詞にいれました。

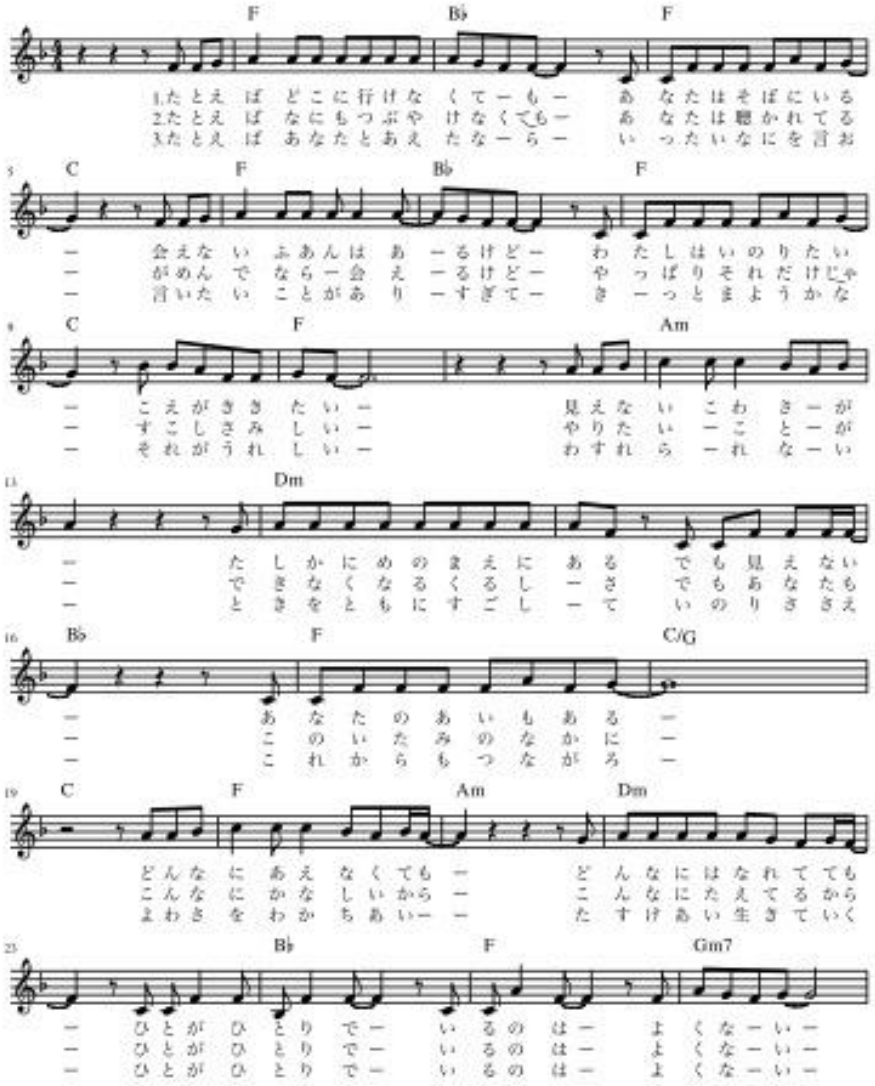
2021年度になって、少しずつできることが増えていく中で、1番の歌詞に少し「違和感」を感じるようになってきました。(現在、再び1番の歌詞に近づいている状況ですが…)。この「違和感」の中から、3番を作ろうという話になり、できることが増えてきた生徒たちの言葉を思い起こしながら歌詞を書き足しました。ある授業の中で、もしコロナが収束したら何をしたいかと聞いてみたところ「話したい」と言う生徒がいました。電話、LINE、Zoomでも話しているはずですが、それでも自由に「会って話す」ことを待ち望んでいるのだなと思わされました。それは、教会に集う人たちも同じでしょう。

コロナ危機の中に生きる青少年たちに出会わされたからこそ「あなたと」は生まれた賛美です。そのような出会いの中に自分がいたことを神さまに感謝したいと思います。最後にこの賛美を整えていく中で、協力してくれた青少年伝道室の方々、岩下星南さん、酒巻アシュリーさん、西野修平さんにこの場を借りて感謝を申し上げます。ありがとうございました。なお、この賛美は、https://youtu.be/713_36EuyIY、またはQRコードからご視聴いただけます。

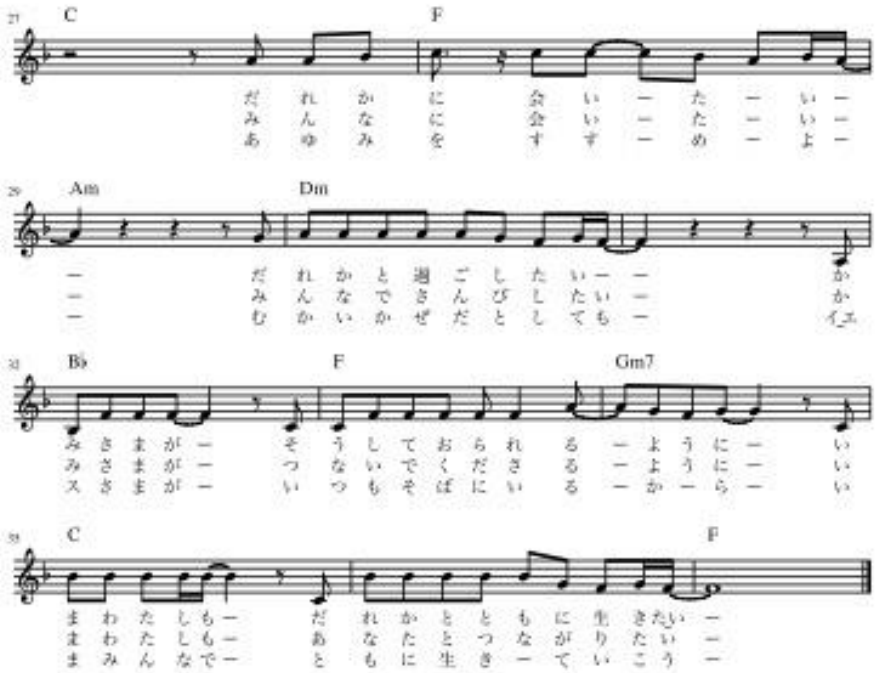
あなたと

少年少女ひろば メッセージソング

作詞・作曲 本山大輔



©日本バプテスト連盟



1. 例えば どこに行けなくても
あなたは そばにいる
会えない 不安はあるけど
わたしは祈りたい 声が聞きたい
見えない怖さが
たしかに目の前にある
でも 見えない あなたの愛もある

どんなに会えなくても
どんなに離れてても
人が独りでいるのはよくない
誰かに会いたい 誰かと過ごしたい
神さまが そうしておられるように
今 わたしも 誰かと共に生きたい

2. 例えば なにもつぶやけなくても
あなたは 聴かれてる
画面でなら 会えるけど
やっぱりそれだけじゃ 少しさみしい
やりたいことが
できなくなる苦しさ
でも あなたも この痛みの中に

こんなに悲しいから
こんなに耐えてるから
人が独りでいるのはよくない
みんなに会いたい みんなで賛美したい
神さまが つないでくださるように
今 わたしも あなたと繋がりたい

3. 例えば あなたと会えたなら
一体 なにを言おう
言いたいことがありすぎて
きっと迷うかな それが嬉しい
忘れられない
時を共に過ごして
祈り支え これからも繋がろう

弱さを分かち合い
助け合い生きていく
人が独りでいるのはよくない
歩みを進めよう 向かい風だとしても
イエスさまが いつも側にいるから
今 みんなで 共に生きていこう

©日本バプテスト連盟

「れいはいさいこう」（聖歌隊練習再開から）

大井バプテスト教会　菊地　るみ子

私にとっての礼拝とは。教会に集う意味。賛美歌はなぜ歌うのか。聖歌隊は本当に必要なのか。これらの問いはコロナパンデミックによって教会にもたらされました。

大井バプテスト教会は2020年緊急事態宣言発出直後から、オンライン礼拝、短縮礼拝となり、聖歌隊の礼拝でのご奉仕や毎週水曜日に行われていた聖歌隊練習もお休みになりました。つまり賛美歌を歌う行為はこの状況下では「不利」な立場に立たされ続け、「飛沫が飛ぶ」「感染しやすい」として教会の中でも真っ先に注目の的になりました。「練習まで制限されるのか、仕方がない．．．」と自分に言い聞かせながらも、何とか一日も早く再開したいと祈り願っていました。

しかし、ご承知のように感染が拡大するばかり。「2年ぐらいは無理かな」と思っていたのです。また教会は新礼拝堂建築の時期。礼拝も分散礼拝とオンライン礼拝のハイブリッドで行うようになっていました。そんなある日のこと聖歌隊メンバーから、次のような声が複数届くようになりました。「最近声が出しにくくなりました。このまま歌わなかったら声が出なくなるかも…。賛美歌を忘れてしまう。いつの日かの

再開を目標に練習だけはしたい。」切実な声でした。

そこで、音楽委員会で話し合い「マスク着用」「十分なスペース確保」「換気を確実に」など徹底する。遂に2021年11月3日水曜日に再スタートしました。勿論強制ではなく「リハビリのつもりで始めましょう」でしたので、発声練習、思い出すためにユニゾンの曲から始め、祈り会を含めて40分の練習が始まりました。「歌を歌う」酸素を吸って吐くことは体内の血液循環を活性化し、少しでも「歌う勘」を取り戻すためにとてもよい時間になっています。そして礼拝では毎週、会衆の代わりに賛美歌を歌う「賛美チーム」として3名ずつご奉仕しています。心なしかメンバーの顔色もよくなっているような気がします。

「賛美歌を歌う意味」、「聖歌隊の必要性」などゆっくり考えながら、これからもできることを模索しつつ、神さまのみ業とご栄光を賛美してまいりたいと願います。

神奈川連合礼拝音楽研修会　報告

神奈川連合音楽部員　白井由季子（百合丘キリスト教会）

前回研修会を開催したのは、2019年の大雪の日でした。予定を繰り上げて午前中で終了したため今回再度、江原美歌子先生からのお話を伺える機会となりました。Zoom開催のため、当日の音声状況など心配もありましたが、部員以外からのご協力もいただき41名の参加で開催することができました。

冒頭「なぜ『新生讃美歌』について学ぶのか？」の問いかけのもと、『新生讃美歌』の成立の経緯や特徴を改めて学びました。初めは伝道集会用に作られた『新生讃美歌』に礼拝で使用する賛美歌を加え、さらにオリジナルの賛美歌106曲を加えて1冊に編纂されました。信徒も参加して作った賛美歌集であり、声を上げていくことができ、そのためには中身を知る必要があるとのことで、学びの目的を確認できました。「賛美歌集」は生きていて「今」の賛美歌が入っていることが大切とも学びました。

またコロナの状況下にあって制限のある中での会衆賛美について、「会衆賛美は礼拝への参与であり、人々と声を合わせ賛美することで感情を表し、経験も倍増する。信仰の言葉を音楽に乗せて歌うことで養われ応答を引き出す。会衆とは、大勢のイメージがあるが、2人3人と集まる中での賛美は会衆賛美となる」ことをあらためて学び、「今できる」賛美を捧げようと感謝しました。

全体プログラムを通して、4曲賛美することができ、画面越しではありましたが、会衆賛美を体感いたしました。2部では美男亭ちぢれ氏（飯塚道夫兄）による福音落語「Zoom礼拝ああ大変！」でも声を出して笑い（写真左）、その後研修の恵みを分かち合い、質疑応答の中ではリモート礼拝による賛美歌の著作権問題についての悩みを共有しました。礼拝堂での高らかな会衆賛美を期待しつつ研修を終えました。

※　連合や地域の教会で「新生讃美歌ブックレットを用いた研修会を開催しませんか？

お問い合せは教会音楽室まで。

kyoukai-ongaku@bapren.jp

048-883-1091(代)

第8回教会音楽カフェから

3/1(火)、第8回教会音楽カフェでは、テーマ「これからの教会音楽　～変わるもの、変わらないもの～」のもと語り合いました。　**参加人数28名**

機構改革案が書面総会で決議され、23年度からは宣教部の体制が大きく変更されることとなりました。現段階での課題や機構改革後の教会音楽の働きについて語り合い、7～8名、4グループに分かれて忌憚なく意見が交換されました。以下、わかちあわれた一部をご紹介します。

- 礼拝音楽の研修は必要。地方の教会は過疎化が進む中、奏楽者ほか音楽の奉仕者が減少している。中国四国地方連合の教会音楽研修会で、「音楽の基礎を学ぼう」という企画があり、「奏楽なんてできない」と思っていた人を対象にした研修がなされ、「私にもできる」に変えられた。
- 北関東連合は、連合の音楽担当者が主催し、年に5回ほど教会音楽のプログラムを行って、各教会励まし合いながら、たえず教会音楽の情報交換を行っている。
- 情報交換、つなぐ働きが必要。「教会音楽カフェ」にそれらの機能を期待できるのではないか。
- 現場の声が聞かれないなか短期間に変革が進められていることは残念。「変わらないもの」は礼拝を続け、賛美歌を歌い続け、聖書を読み続けること。その中に教会音楽の役割がある。財政課題が改革の理由となっていて、改革のスピリット（神学）が共有されていないのではないか？
- 戦争やコロナなど危機が多くて悲しむ人が多いからこそ、音楽という拠り所が慰めになっていく。音楽の力は大きい。それを繋ぐ場を作りたい。
- 賛美歌改訂等の長期的な企画に予算は着けられるのか。
- 東京バプテスト神学校教会音楽科の機能を「常設委員会」に置いて、研修機能を残すことができないか？
- 教会音楽が弱くなれば礼拝に影響がある。礼拝が弱くなれば教会に影響がある。教会音楽と礼拝は切り離せない。
- 宣教と賛美は伝道の働きの両輪。信仰継承のための教会音楽の働きは大きい。何らかの形で働きを続けていくべき。
- 『新生讃美歌』出版の責任にはカスタマーサービスだけでなく「推進」も含まれており、賛美歌と宣教の課題、新しい歌推進等は、連盟として取り組むべきことではないか。

第9回は4/5(火)、同テーマで開催予定です。

礼拝に参与される皆様の参加をお待ちしております！

著作権　情報！

礼拝動画配信での『新生讃美歌』内賛美歌使用について

礼拝を録画しインターネット掲載・公開する場合、およびYouTube等で礼拝のライブ配信をする場合、2022年度末(2023年3月31日)まで、使用許可申請をせずに使用できます。（申請不要期間を延長しました。）詳しくは、連盟ホームページをご覧ください。申請不要リストも更新しております。

動画配信における賛美歌配信についてのお問い合わせは048-883-1091(代)または kyoukai-ongaku@bapren.jp までお願いいたします。